

## 私の生家

阿讃山脈が瀬戸内海の燧灘ひうちなたを噛む讃岐と伊予との境に、人口約一万二千の豊浜町（戦後、豊浜町と和田村とが合併）がある。私はその町の農家の二男として、明治四十三年三月十日に生まれた。

大平家の古い家系は明らかでないが、戦国時代に土佐から移り住んで、このあたりを支配していた大平伊賀守国祐という豪族の末裔に当たるものようである。その居城があった城山（獅子ヶ端山）には、今でも城をめぐる石垣や泉の跡がある。

城山の麓に、「院内」「梶谷かじや」「直場じきば」の三部落がある。かつて院内には国祐の内閣があり、梶谷には鍛冶工がいたし、直場には直参が住んでいたといわれている。

城主伊賀守国祐は、四国征服途上の長曾我部に追われて、家臣の下に身を寄せたといわれているが、その後の消息はさだかでない。嫡子は城山の南側にある「乳母ヶ懐池」に乳母に抱かれて入水、息女は豊浜町の「姫浜」の沖に身を投げてあえなく果て、弟だけ災禍

を免れてこの地に落ちついたという。国祐の菩提寺「国祐寺」は、今なお大平姓を名乗って法燈を守っている。大平一族はその後、この地で農業を営んできたが、私が生まれたときには、長谷、院内、梶谷の三部落に十軒ばかり残っており、いずれも農業を生業としていた。

父は大平総本家の分家に育ったが、二男であつたので、さらに分家して新しく一戸を構え、一町二、三反の田を自・小作する中農であつた。村会議員や、溜池の水利総代等の名譽職をしていたところを見ると、相当の世間的信用はあつたようである。頑健、清快で、よく働き、人の世話もいとわなない心のやさしい人であつた。

父は、明治三年生まれで、これという学歴はなかつた。しかし、一応書はよくするし、和漢の古典にも相当通じていた。和綴の本のところどころに、朱の紙片が貼付してあつた。これは、そのくだりに疑問がある印で、疑問が解けるとその紙片をそつととり、本自体は、全然汚されないように配慮されていた。これは本に接する心構えが真剣であつたことを示しているものといえよう。

父は酒が好きで、晩酌を欠かさなかつた。また割合交際が広く、人に招かれることも多

かつた。部落の店から盆暮の決済で日用品を掛買する通帳には、三銭とか、五銭の豆腐やあげの買入れの記載にまじって、一円二、三十銭の清酒が、大体、一週間ぐらいの間隔をおいて記入されていたことを覚えている。

母は隣の大野原町の詫間家の長女で、どちらかという社交性をもった勝気な女性であった。当時、詫間一家は朝鮮に移住し、慶尚北道迎日郡の大松面というところで雑貨商を営み、伯父はその面長をしていた。ただ祖母だけは、どうしたことが独りで留守宅を守っていた。

米麦を主とする当時の農家の家計は、けっして楽ではなかつた。私のうちは、子供が六人（男三人女三人）もいたのでなおさらであつた。私はもの心がついてから、漬で袖がピカピカ光っている着物を着て、稲藁で作つたぞうりをはき、一汁一菜に麦飯（もちろん米が三、四分は入っていた）を食べて育つた。海浜近くに住みながら、鮮魚にありつくのは祝祭の日くらいで、たまに食膳に見かけるものは、鱒や鯖の干物であつた。

一方、学業のかたわら、私は小さいころから野良仕事に駆り出された。田植え、草取り、稲刈りはもちろん、役牛の世話に加えて副業にも追われ通しの毎日であつた。休祭日だけ

が待ち遠しかった。待ちかねた休祭日には、夜おそくまで友だちと、野に、山に、海に、遊びほうけたものである。山では松茸や筍をさがし、海では海水浴や釣りを楽しみ、小川では小魚をとることに夢中になったものである。夜は演芸会をやったり、時には暗闇の中で幽霊に仮装し、仲間の度胸を試す試胆会に興じたこともあった。

当時の農家の副業は、はつかんさなだ麦稈真田を編むことであつたが、やがてそれは肥料かます吠や、塩吠の製造に移つていった。麦稈真田は、硫黄で漂白した麦稈を手で編んだヒモ状のもので、麦稈帽子の原料であつた。吠は稲稈を柔らかくして手織機械にかけてつくつた肥料や塩の包装で、今日では姿を消してしまつているが、当時は貴重な包装材料であつた。麦稈真田も吠も、一日の通常のノルマを仕上げた収入は原料こみで二、三十銭から、せいぜい数十銭であつた。いずれも典型的な労働集約的な副業で、私のうちでは、母が住み込みの作男や女中はもとより、私たち子供にまで日々のノルマを課していた。ちなみに私のうちには、一人の作男と一人の女中が、年期契約で住み込んでいた。

また、家によつてはサトウキビをつくり、白下糖を製造していた。私のうちでも近所と共同でやつていた。初冬のころ、畑にサトウキビが生育すると、それを刈り入れ、これを

牛力を借りて廻す大きい白で絞り、濃い糖汁をつくる。その汁を大きい釜で煮て白下糖にするのである。茶褐色の白下糖が四斗樽につめられて固い結晶になるころ、町から商人が天秤棒をかついで買取りにくる。天秤棒は正直であるが、商人はかならずしも正直とはいえなかった。白下糖で充たされた樽の重さに比例して、天秤棒につられた分銅が上昇運動を始める。商人はその運動が静止するのを待つことなく、たくみに分銅の首の根をひねってその上昇運動を止め、平然と風袋込みの重量を宣言するのである。だが、その狡い所作に対して、居合わせた大人たちはなんの抗議もしない。幼い私には、とてもそれがくやしくてならなかった。

## 水と借金

昔から「讃岐三白」といって、讃岐は米と塩と砂糖の名産地として聞こえていた。このうち砂糖は、私の少年時代にすでに姿を消してしまったが、塩の方はつい先年まで、日本の三分の一余を生産する名産地であった。

しかし、製塩の方法も入浜式から流下式に、さらにはイオン交換膜を利用した化学製塩に移行することになり、古い伝統を誇る讃岐の塩田も、十年ほど前について姿を消してしまった。今日、国内の製塩業は七つの化学製塩会社に集中し、塩のメッカ讃岐には「讃岐塩業」一社が、わずかにその残光をとどめているにすぎない。もう一つの米作は、讃岐においても食糧制度に支えられて、いぜんとして農業の主流をなしている。

当時の農家には、おしなべて借財が多かった。私のうちもその例外ではなく、借金のことについて父母が、ひそひそ話をしているのを耳にしたこともしばしばであった。貸し主は最寄りの村や町の地主兼肥料商であった。農家は肥料代ばかりでなく、生活費の不足分

までも借りていて、秋の収穫を待つて、その全部または一部を決済していた。金利はたしか月一分くらいであったかと思う。

毎年の収穫によって借金の返済ができる間はよいが、それができなくなると、役牛はあろか、先祖伝来の田畑までも手放さねばならなくなる。そうした家庭を相互に救済するために、十軒または二十軒くらいの単位で、頼母子講というものをやっていた。これは第一回の掛け金の全部を、特定の被救済者に与える仕組みになっていた。私のうちでも時折、頼母子講がもたれていた。農協が産業組合として誕生し、信用事業に手を染めるようになったのは、それからしばらくたってからのことである。

小作料は「年貢」といって、米による物納であった。二毛作の田で、反当り平均米一石程度であった。地主は、所有地からの年貢のほか、肥料の売買益や貸金による利子収入もあったから、当時の農村では目立って富裕な階層を形成し、よく県の境界を越えて相互に縁組を行っていた。地主の生活は概して質実で、多額の戸数割（戦前の地方税の一種。昭和十五年に廃止）を納めて、地方の財政を支えていたが、災害時には進んで巨額の私財を投じて、その復旧に協力していた。またさまざまな公私の寄付にも応じていた。私の父も

事あるごとに「旦那」（地主のことをこう呼んでいた）のところに駆けこんでいたようだ。また、地主はその子弟をきそつて上級学校に進学させたから、日本の近代化に貢献した多くの人材が、この階層の中から出た。しかし地主の多くは、戦時中の地代の金納化と、戦後の農地改革を契機として急速に没落し、現在では荒れはてた大きな屋敷が、往時の名残りをとどめているに過ぎない。

農家の経営にとつて、農業用水は命の綱であつた。とりわけ讃岐は、降雨量が少ないので、日照りが続くと用水の確保は死活の問題になつてくる。私も枯れかかつた稲の一茎一茎に、土瓶で丹念に水をかけてやつたことを覚えてゐる。干ばつにあうと、村人たちは揃つて神仏に雨ごいをするのであるが、私もよくその仲間に入れてもらった。また水盗人を不眠で警戒したこともあつた。事実、水をめぐる争いは、ときに刃傷沙汰におよぶことさえ珍しくなかつたのである。

そういうこともあつて、讃岐には無慮三万にもぼる大小の溜池があり、冬のうちから余水をためておいて、夏の灌漑に備えることにしていた。弘法大師（空海）は、讃岐の屏風ヶ浦に生まれた名僧であるが、彼は真言宗の創始者であるばかりでなく、偉大な技術家



であり、すぐれた政治家でもあった。その足跡は国の内外に及び、その事績は多彩であり、その構想は壮大であった。日本一の溜池、満濃池まんのういけ（灌漑面積約四千六百余町歩）をはじめとして、大師の築造にかかる溜池は、いまなお数多く残っている。

ところが、この讃岐の水不足も、先年竣工した「香川用水」によつて、ほぼ完全に救われることになった。香川用水は吉野川の水を、阿讃山脈を貫くトンネルを通して讃岐平野に導くもので、六百九十九億円の巨費を投じ、十三年の工期を費やして先年ようやく完成したものである。吉野川の水の導水は、讃岐人にとっては永い永い見果てぬ夢であった。この夢がついに実現したのである。私は、香川用水推進連盟の会長として、この仕事にとり組むことができたことをたいへん光榮に思っている。

## 小・中学の頃

農民の生活は、春夏秋冬を通じてはげしい労働の連続であり、しかもその報いは乏しかった。凍土の中から萌え出る麦の芽とともに、正月が明ける。晩春、青い麦が色づく頃、苗代には稲の苗が新しい出番を待っている。田植え、草取りが済むと炎暑を迎える。秋の収穫を終えると、やがて灰色の冬がめぐってくる。農家はげしい労働は、こうした壮大な自然のリズムとともに繰り返されるのである。

それでも農民には、それ相応の楽しみがあった。少年時代の私にも数々の甘美な思い出がある。そしてその多くは、祭日や休日と結びついている。当時の農村生活は旧暦によっていた。年が明けると一月の初三日、七日、十五日、十六日というふうには休日が続く。正月は神棚のしめ縄とおとそに明ける。炊いても焼いても、モチというものはうまいものである。また、いつまでたっても飽きないものでもある。三月三日、五月五日、八月十五日はいずれも節句。三月三日は桃の節句で、女の子の祭りである。ひな人形が飾られ、紅白

の炒飯いじりあわが供えられる。五月五日は男の子の祭りで、鯉のぼりが五月の空にひるがえる。八月十五日は馬の節句で、もち米でつくった馬が登場する。七月の十三、十四、十五日と二十四日はお盆で、先祖の霊を迎え、そして送る。盆のご馳走はソウメンとダンゴである。十月に入ると、村々は鎮守の祭りで、各部落は美しい装いをこらした太鼓を繰り出して、その偉容を競いあう。また村人たちは、精一杯のご馳走をつくり、近隣の町や村から親類、縁者を招く。この祭りは三日も続き、それが済むと収穫の秋が来る。

その他、観音さま、天神さま、清正公さま、お稻荷さまなどを祭る杜やしひや祠ほこらは、皆それぞれの祭日をもっていて、周辺の善男善女を集める。人々は、縁日の屋台の間をぬって、夜ふけまで飽かずねり歩く。そこでは数々のロマンスがはぐくまれたことであろう。それぞれの祭りには、それぞれの個性があった。

私は幼少期を、そういう環境の中で育った。その時期は、大正の初めから昭和の初めにかけてのことで、大正デモクラシーの花が咲いていた。もちろん農民の生活の底辺には、重い生活苦と暗い争いが絶えなかったが、どちらかというとりべらるで平穩な時代であったといえよう。高松から松山に通ずる国鉄が開通し、家々に電燈がついたのもその頃であ

る。私を育ててくれたところは、西讀の三豊平野を中心とした天地で、和田村の小学校と、観音寺市にある県立三豊中学校が二つの基点を成していた。私はもちろん富裕ではなかったが、とくに困窮することもなく、これという秀才でもないが、手がつけられない悪童でもなく、無事平凡に幼少期を送ることができた。

ところが中学四年の夏、私は腸チブスをわずらい、四カ月もの間生死の境をさまよったことがあった。が、そのときは幸いにも九死に一生を得た。その間、病床の私を昼夜の別なく献身的に介抱してくれた父は、その翌年の夏、五十六歳で胃潰瘍のため死んだ。それはわれわれ家族にとって、突然訪れた不幸であり、致命的なことでもあった。母は病身であり、若い兄が家業を継いだが、途方に暮れていたにちがいない。しかし、母も兄も不幸にめげることはなかったし、また私たち弟妹に細やかで温かい配慮をしてくれたことはありがたかった。

兄は私より一年の年長であったが、二人の間には体力や学力に優劣がなく、よく喧嘩もしたが、仲のよい兄弟であった。兄は意志が強く、妥協を許さない潔癖な性格であった。しかし生涯を通して、私のために自らを犠牲にしてよく尽くしてくれた。そんな兄だった

が、豊浜町の町長を三期勤めたあげく、昭和五十一年末、にわかに関臓病で他界した。

中学における私のクラスは、三豊中学の定員百人の最後のクラスであったが、珍しく秀才が多く集まっていた。もっとも私は、中の上位の成績で一向にさえなかったが、卒業生八十人のうち、たしか旧制高校に十二、三人、旧制の高専に十四、五人が入学するという記録を残した。クラスには通産省を退いて現在実業界にいる森哲夫君、京大名誉教授の佐伯富君、現在、香川県の医師会長をしている松岡健雄君はじめ、多くの人材がいた。

中学時代は、予讃線の豊浜と観音寺の間を汽車通学した。当時、伊予の川之江から通学していた先輩に橋本克彦という秀才がいた。きわめて寡黙で、柔和で控え目な人であった。その温容と端正な態度、鉛筆で丹念に記録した美しいノートは、私にとってはたまらない魅力であった。六高から東大の文科（歴史）に進み、その後中央大学の教授になられた。私には、橋本さんの勉強に対するひたむきな姿が、美しく思えてならなかった。

田中隆造という優しい先輩もいた。私の村の一番の金持ちの令息であったが、服も帽子もかばんも靴も、ボロボロになるまで平気で着用していた。その簡素で質実な生活態度に、私は深い感銘を覚えた。野球部のマネージャーとして部員の信望を集めていたが、われわ

れ後輩にとつても優しいよい先輩であつた。私は田中さんの真摯で、しかも柔らかい親切な人間味に強くひかれていた。田中さんも、六高を経て京大法科を卒業し、今では阪神電鉄の社長として活躍されている。

中学校では、中井虎男先生の数学と、細川敏太郎先生の漢文が忘れられない魅力ある講義であつた。中井先生はお若い頃から肺を病んでいたが、毎朝の冷水浴で立派に自らの活力を支えておられた。私も先生にならつて、五十歳になるまで毎朝冷水浴を欠かすことはなかつた。おかげで風邪をひかずにすまふことができたように思う。細川先生は神宮皇學館出身の漢学者で、そのリズムミカルな講義は、若い私の心を強くひきつけて放さなかつた。